



TITLE:

瞿秋白と初期左聯

AUTHOR(S):

浅野, 純一

CITATION:

浅野, 純一. 瞿秋白と初期左聯. 中國文學報 1985, 36: 81-109

ISSUE DATE:

1985-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177410>

RIGHT:

瞿秋白と初期左聯

淺野 純 一
京 都 大 學

序

茅盾は最近の回憶の中で次のように述べている。

「(一九三二年)十一月、『左聯』執行委員會は(中國無産階級革命文學の新たな任務)という決議を通過させた。決議は馮雪峰が起草し、瞿秋白が少なからざる心血を注いで改め、執行委員會も何度も研究した。(中略)

『左聯』の成立から一九三一年十一月までは『左聯』の前期で、それが左傾錯誤路線の影響からしだいにぬけだす段階だといえる。そして一九三一年から『左聯』は成熟期にはいって、基本的には『左』の桎梏をぬけ出し、勢いよく發展しはじめ、四方に出撃する段階だといえる。この轉變を促進したものとしては、まず瞿秋白の功績を

瞿秋白と初期左聯(淺野)

記さなければならない。もちろん魯迅が『左聯』のリーダーであり、彼はこの轉變を斷固主張したのだが、畢竟彼は黨員ではなく『統一戦線の対象』であった。そこで『左聯』の聯盟員の中の黨員同志の多くは、彼に對して尊敬は餘りあったが従うことは不充分だった。秋白はちがっていた。彼はその時、王明路線の排斥を受け、黨中央では『傍流』であったが、黨員の中の威望と文學藝術上の造詣の深さは黨員たちを心服させた。だから、彼が『左聯』の指導の仕事に参加したとき、このことと彼の魯迅に對する充分な信頼と支持とが魯迅に虎の翼を添えたのである。⁽¹⁾」

一九二六年、郭沫若が『革命と文學』という論文で「我々の要求する文學は、無産階級社會主義寫實主義に同意する文學だ⁽²⁾」と述べたのを皮切りに、左翼作家聯盟(左聯)が成立する前年まで、いわゆる「革命文學論争」が成仿吾らの創造社(第三期)・太陽社などと魯迅・茅盾らの間で戦わせられる。革命文學を主唱した創造社・太陽社の若い文學

者たちは、それ以前の文學に對して、單に反封建のためだけの文學であり、小資産階級の文學であると否定し、攻撃すること自分たちの立場の優位を保證しようとしていた。⁽³⁾これに對し、魯迅らは彼らの革命文學の未熟さ不充分さを暴き、厳しく反駁した。茅盾は「新寫實主義」を主張し、⁽⁴⁾魯迅は文學理論だけでなく、文學や革命に對する文學者の態度の問題もとりあげ、さらに左聯の成立當初にもへ左翼作家聯盟への意見やへ《三閑集》序言⁽⁵⁾で革命文學派にこだわりつづけている。

革命文學派の中の多くの人々は、その主張から當然中國共產黨に入黨していたのだが、その共產黨の指導によつて彼らは「讓歩」し、⁽⁶⁾また魯迅も革命文學論爭を通じて共產黨に近づきつづつた。⁽⁷⁾その結果「過去を清算して」自由大同盟⁽⁸⁾が結成され、更に一九三〇年三月二日に左聯が成立する。だから左聯は革命文學を成熟させ、政治と文學を的確に關係づけた政治的文學結社であつたはずである。

しかし、左聯はその成立當初から一致した見解の下に團結した文學結社であつたとはいいがたい。政治上の統一戰

線の立場から「拜金主義の群小が我々の目前の敵である」⁽⁹⁾というのが共同の認識であつたにすぎない。このことは後に述べるように成立時の綱領からも知ることができる。

左聯が理論的にも實作においても本格的に文學運動の中心になるのは、一九三一年後半からである。それまでは主要には共產黨内を支配していた極左路線（李立三路線——後述）の影響の下で、また革命文學派のセクト主義が尾をひいた形で、文學團體としての左聯は活動が非常に限られていた。左聯が本格的に活動を始めるひとつのメルクマールとなるのが一九三一年十一月のへ中國無産階級革命文學の新たな任務（以下へ新たな任務と略稱する）である。と茅盾は述べているが、實際はどうであつたのだろうか。またそこでの「瞿秋白の功績」とはどのようなものであつたのだろうか。本論では冒頭に引いた茅盾の文章を手がかりにして、多少ともそれらを明らかにしたい。

初期 左聯

左翼作家聯盟は一九三〇年三月二日に成立大會を開く

(ここでは矛盾に従って一九三一年十一月までを左聯の初期として扱う)。この大會については『拓荒者』、『沙命』、『大衆文藝』の三誌に掲載されている報道記事からおよそのことを見てとることができる。この時、魯迅・錢杏邨・沈端先ら五十餘人が出席し、理論綱領・行動綱領・主要な工作方針が決議されているので、まずここから論を始めたい。

これらの綱領は、はなはだ簡素で明瞭である。「豫言者」「教師」としての文藝は「人類社會の進化」の使命を負うので、文藝を目前の「血なまぐさい闘争にさざげざるを得ない」と文學が政治に従屬することを認めるかたわら、「われわれの藝術は、無産階級がこの暗黒の階級社會の『中世紀』において感じた感情を内容とせざるを得ない」と無産階級の立場からの寫實主義^{リアリズム}を、初歩的にはあるが提起している。さらに左聯の藝術が、反封建・反資産階級・反小資産階級の傾向の無産階級藝術誕生のための藝術であると規定して、そのための理論建設の重要性を述べたごく短いものである。その上で二つの行動綱領と五つの工作方針が提出されているが、この中でも文學理論の建設を以後

瞿秋白と初期左聯（淺野）

の重要な課題としている。

「軍事圍剿・文化圍剿」といわれる厳しい時期の上海で、このような政治的文學結社——政治的立場を明確にした文學結社が多くの文學者を擁して成立したことは、そのことだけで大きな意味をもつことではある。

しかし、一九三〇年の段階ではソ聯でも「公式」の文學理論——社會主義リアリズム論は定義されていなかった。¹⁰⁾中國では左聯結成の前後からソ聯の最新の文學理論——ブハーリン、ルナチャルスキーらのものが英語譯や日本語譯を通じて紹介されはじめるようである。したがって左聯成立の時、その運動と聯盟員個々の作家の創作を導くべき文學理論を實は持っていなかったのである。だからこそ理論建設が左聯にとって緊要の課題であった。魯迅も左聯結成大會の講演の中で、革命文學論争のことをふり返って「私はその時、マルクス主義批評の射撃法を上手に使う人がでて来て、私を狙撃するのをまっていたのですが、そんな人間はついに出現しなかった。(中略)だがわれわれは今後この點にこそ注意を向けなければならないのです」と、

「ついでに」ではあるがマルクス主義文學理論の重要性を強調し、そのすぐ後にも「我々は批評家を必要とする」⁽¹²⁾という文章を書いている。

しかし、綱領や魯迅のこの指摘にも拘らず、一九三〇年から三一年前半まで論争らしい論争、理論らしい理論は見當らない。文學の理論の缺如は、それゆえに政治の實際活動によって埋め合わされる方向へ向ってしまった。

一九三〇年のメーデーに向けて左聯系の雑誌が合同で《五一特刊》⁽¹³⁾を刊行したが、その冒頭に「左翼作家聯盟『五一紀念宣言』」という記事が掲載されている。それには「我々は世界の労働者と一緒に、帝國主義及びその一連の反動的な手段に對して、血ぬられた『五一』の總デモンストレーションを行わなければならない」と文學者（及び藝術家）に政治上の實際行動を呼びかけている。文學者が政治上の實際行動に参加すること自體は別に問題はない。丁玲が當時を回想して「わたしはまた一二度左聯のステッカー貼りの活動に加わった。（中略）當時のわれわれは、これをたいへんなことだと考えていた。（中略）皮のコートを着、

ハイヒールをはき、とてももったいぶったいでたちだった」⁽¹⁴⁾と言う時、ほほえましささえ感じさせる。しかし、問題はそのことにあるのではない。「そのころ上海の黨中央とわれわれ數人の若い黨員で主要な者は『左聯』を直接的な政治行動を行う一般大衆の革命團體とみなしてしまい、さらに左聯が特別に發揮しなければならない特殊な戰鬥能力と作用——文學鬭争と思想鬭争、文學鬭争と思想鬭争を通して政治鬭争の任務を完成させることを輕視するに等しかった」⁽¹⁵⁾ということが問題なのである。

こうした文學不在の狀況は、左聯關係の雑誌發行狀況からもうかがえる。一九三〇年後半から翌年前半にかけてはほとんど出版されていない（附表参照）。もちろんその原因の最大のものは「文化圍剿」といわれる國民黨の嚴しい彈壓であり、左聯に限らず左翼の出版物は發刊と發禁のいたちごっこだったのだが、それにしても五十餘人を擁する文學團體としてはやはり少なすぎる。また、左聯成立時に四部門の研究會が設けられているが、六月のその報告でも「各部門の工作は依然不振」⁽¹⁶⁾であった。

要するに文學的活動——特に批評と理論研究に對して急を要するという問題意識は、左聯内部にかなり強く存在していたのだが、現實には街頭デモやビラ貼りといった政治活動が左聯という文學結社のこの時期の主要な活動となっていたのである。左聯が一つの政治的な立場に立つて結成された、文學より政治を優先させる結社であるという時、文學が政治において果す役割が適切に位置づけられていたため、というより文學自體の缺如のために、目前の政治上の直接的な課題がその輕重を問われることもなく重視されざるを得なくなったのである。このことについて茅盾も序に引いた部分の前でこう述べている。「二度の全體會議（四月と五月）に参加した後、『左聯』はそれが文學團體だというが、むしろ政黨のようだ、と私は感じた。この感じは一九三〇年八月四日『左聯』執行委員會を通過した決議（無産階級文學運動の新たな情勢及び我々の任務）を見て更に強まった。」

この、茅盾に左聯が政黨のようだと感じさせた決議は、左聯のこの時期の理論をよく代表していると思われるので、

瞿秋白と初期左聯（淺野）

どのようなものか次に検討しておく。

〈無産階級文學運動の新たな情勢及び我々の任務〉^(m)（以下〈我々の任務〉と略稱）は、六章からなり、それぞれ、(一)國內外の政治情勢、(二)資本主義文化と革命的文化、(三)文學運動と左聯の性格、(四)革命の高潮と左聯の役割、(五)左聯の缺點、(六)右傾との闘争、と小見出しをつけて理解することができる。この中ではまず情勢の見方が問題になる。中國は帝國主義の世界の中で「最も弱い環」であり、中國革命は世界革命の引きがねになる、しかも「新たな革命の高潮」——武装蜂起とゼネストによって都市で革命を勝ちとるような情勢が目前にあるという認識である。これは實は、このころ共產黨内でイニシアチブをとっていた李立三路線⁽ⁿ⁾の左聯版であった。この李立三路線はこの年九月、中共第六期三中全會でいちおう批判されるのだが、その影響力はまだ大きく残っていたのである。

ところでこの情勢認識のもとらす結論が直接的な武装蜂起の準備であつてみれば、文學がその「特殊な戦闘能力と作用」を發揮する餘地はありえなくなる。だから「資本主

「義文化」を「反動的大同盟」と抽象化・一般化してしまい、その個別の作品を検討することはない。また、左聯の役割は「中國無産階級文學運動を指導する上で、作家の單純な同業組合であることは許されず、文學闘争を指導する廣汎な大衆の組織でなければならない」のであり、左聯の主要な缺點も、この「組合主義」である。

文學理論としても、勞農兵通信員運動を提出したにとどまる。「通信員運動の發展過程は少しの疑いもなく無産階級文學運動の發展過程である。中國無産階級文學運動が過去に提出してきた大衆化のスローガンも、ただ通信員運動のただ中にのみ具體的な方法を見出すことができ、その他の作家の生活の問題、小資産階級意識の克服の問題、作品の内容と形式の問題もここにおいていささかの困難もなく解決を得ることができるにちがいない」と、すべての問題を通信員運動に流し込むのである。

文學者が机上で觀念的に革命文學を弄んでいた革命文學論争を反省して、現實の中にコミットしていくことによってより豊かな内容の文學を作りあげる可能性を見出そうと

する熱意を、ここから読みとることはできる。また、ソ聯やドイツで或る程度成果のあがっていた勞農兵通信員運動を中國に移入しようとする意欲もあつたであらう。²⁰しかし、やはりこの決議は文學の綱領であるよりも政治的決議である。文學が政治に従屬するものであつたとしても、それは兩者の關係に於いてであり、政治をもつて文學に代えることはできない。文學者が政治上の貢獻をなし得るものだとしても、それは彼の名聲を利用するだけのものではなく、實際の作品や批評を通じてのもでなければならぬ。そうでなければ文學の結社など必要ないのだ。

さて、一九三一年になると、共產黨は一月に第六期四中全會を開いて李立三路線を再度徹底的に批判するが、このことが左聯に與えた影響を見出す材料はない。左聯にとってはそれよりもこの年二月七日、柔石ら五人の聯盟員を含む共產黨員二十三人が租界警察に逮捕され、國民黨政府の手に渡つて處刑された、いわゆる左聯五烈士虐殺事件の方がより大きな衝撃であつたにちがいない。おそらくこの事件は左聯の聯盟員に對して「左聯」という組織を再認識さ

せただろう。左聯は確かに「同業組合」ではなく、文字通り左翼の、時の權力に對立し、場合によっては生命さえかけなければならぬ政治性をもった結社であつた、と。魯迅にもこのときすでに逮捕令が出ていた。この事件の後、四月と五月に民族主義文學への協力などの理由で周全平・葉靈鳳・周毓英が左聯を除名されるが、或いはこれも、直接にはないにしろこの事件が一つのきっかけになつていたと考へてもあながち的はずれでないのではなからうか。

この事件について左聯は《前哨》創刊號を「紀念戰死者專號」と題して、抗議を公にする。抗議宣言・追悼文・殉難者の略傳及び遺著と五人の寫眞を載せて、戰死者を記念するにふさわしい内容である。ところが、この事件が起きたのは二月七日であり、《前哨》の出版の日付が四月二十五日、さらに實際に出版されたのは七月になつてである。左聯五烈士虐殺については世界中の左翼文學者から抗議が寄せられていることが翌八月出版の《文學導報》(《前哨》が第二期以降發禁のため誌名を變えたもの)第二期からわかる。このことは事件の内外に與えた反響の大きさを示して

瞿秋白と初期左聯(淺野)

いるが、それにもかかわらず半年近くも左聯は公式に殉難者を記念することができなかったわけである(ただ、魯迅や馮雪峰が左聯の周邊的な刊行物という形でかかわつていた《文藝新聞》という週刊誌は、三月ごろこの事件を報道として載せている)。

このように一九三一年の前半はおそらく、黨籍をもつていた同盟員——左聯の指導者の多くはあまり左聯の活動に従事していなかった(或いはできなかった)のではなからうか。その中で、魯迅・茅盾・馮雪峰らが彈壓の網の目をかくぐつてはそぼそと左聯を守つていたのであろう。このころ魯迅さえ直接の政治活動——黨の連絡係などを行つていたらしい。一九三〇年から三一年前半にかけて書かれた魯迅の「雜文」が他の時期に比べて少ないのもその一つの傍證となるだろう。

瞿秋白の功績

瞿秋白が左聯にかかわりはじめるのがいつであるかは確定できないが、だいたい一九三一年五月から七月の間であ

る。彼は、茅盾とは三〇年四月に茅盾が日本から歸國した時以來連絡をもっていたが、その茅盾の家で初めて馮雪峰と知り合うのが三一年五月であるから、左聯に参加するのはそれより後のことである。

瞿秋白は、一九三一年一月の中共四中全会で李立三路線に對して「調停主義」であつたとして黨中央の役職を追われる。彼はこの時、二度も自己批判の聲明書を書かされているが、後年國民黨の手によつて處刑される時に残した遺著〈多餘的話〉の中で述べられていることと照らし合すると彼の人格の一端をうかがうことができよう。その聲明書の末尾に重病中とあるのは、或いは本當に若い時からの持病の結核が再發したのかも知れない。

いずれにしろ、茅盾と親交のあつた瞿秋白は必ずしも黨の指令によつてだけでなく文學方面の仕事をした。後に《亂彈及其他》の中に收められる短篇小説〈矛盾的繼續〉を書いたのはこの年四月である。あるいは評論だけでなく創作活動ももくろんでいたのかも知れない。

瞿秋白の文章が左聯の雜誌に掲載されるのは《文學導報》

第三期（八月二十日）に載つた〈屠夫文學〉が最初である。

これは先の引用で茅盾が言う〈新たな任務〉のわずか三ヶ月前でしかない。それまでは、中國の新文學とことばについて數篇の文章を書いているがいずれも當時公表されていない。しかし以後は八月に四篇、九月に十一篇と文學に關する評論・雜文をつぎつぎと書いて《文學導報》《北斗》誌上に發表している。これらの文章の中で一貫した主張の一つに中國語の改革（ことばの問題）があるが、いまは「左聯の轉變」に、より大きく貢獻した文章を選ばねばならない。つまり文學上の「左傾錯誤路線」を克服する上でより重要な傾向をもつた文章である。

左聯が成立した年に、ちようど左聯に對抗する形で登場して來たのが國民黨の御用文學者たちの民族主義文學である。その〈民族主義文藝運動宣言〉は、左聯の「階級」に「民族」を對置させて「文學の最高の意義はすなわち民族主義である」として左聯と共產黨を攻撃した、左聯とは逆の立場で政治的なものであつた。その民族主義文學に對して最初の攻撃を加えたのが、先述の〈屠夫文學〉である。

この文章はまず民族主義文學が「どんな非凡な『革命精神』もなく」「非戦小説」にさえ對立する「中國の紳商」の文學であり、實は「非戦小説」さえ反對している軍閥戰爭を贊美することを暴露する。更に「アラビヤ人」に擬せられる中國の老百姓を「中國の黃浦少年・用心棒・ロシアのコサック・ドイツのユンカー」の混成部隊が虐殺を鼓舞していることを「隨海線上」を例にして揶揄し、「國門之戰」を例に、民族主義文學が實は同時に反ソ文學でもあることを述べている。非常に切れ味よく民族主義文學を反論した文章である。この短文は言うまでもなく民族主義文學の政治的な意圖を明らかにするために書かれたのであるが、ここで見逃してはならないのは、その政治的意圖の下に書かれた作品が、どのような美辭麗句を弄んでもまさにその政治的意圖のゆえに文學作品としての價值も低いものでしかあり得ないことを示そうとしていることである。

彼はこの「屠夫文學」を書いたころ、徐志摩の詩を批判して「猫樣的詩人」という短文を書いているが、前者に比べて心なしか精彩を缺くように感じられる。何故だろうか。

瞿秋白と初期左聯（淺野）

民族主義文學と左聯の文學とはいずれも明らかな政治的意圖に基づいた文學である。そして徐志摩の詩は直接にはどちらにも屬さない。しかし社會が動亂の時代にあつては、どちらの政治の派も自派に屬さない文學——耽美的な文學や個人主義的な作品——に對しては壓迫を加えざるを得なくなる。なぜなら、いかなる政治も最終的には民衆を動員しなくてはならないからであり、その端の場合が戰爭である。戰場で兵士として實際に戦うのはいつでも民衆であり、だから政治の派はあらゆる手段を講じて民衆を動員しなければならず、文學もまたその一手段となり得る。だから耽美主義や個人主義などの非政治的、反政治的文學は動亂の時代には政治によって彈壓されなければならない（瞿秋白のいう「非戦文學」もこれに含まれる）。

しかし、互いに對立する政治の派も、民族主義文學と左聯のように各々の派の政治的意圖を宣傳する文學をもつことができのだが、この時、より民衆に依存しなければならなかったのは中國では共產黨と左聯の側であつた（國民黨は主に權力を用いて暴力的に民衆を動員できた）。だか

ら非政治・反政治の文學は左聯の側から、より辛辣に批判されるのであり、毛澤東が後に述べたように文學的價値の高いものほどより政治的に厳しく批判されるのである。だが、やはり後に毛澤東が紅樓夢の文學としての價値を否定できないのと同様、瞿秋白も民族主義文學を批判するのと同じ論法で徐志摩の詩を批判することはできなかった。だから「猫樣的詩人」は精彩を缺く。

つまり、民族主義文學は政治的意圖をもって作品を書くとうとするとき、虚構を作らねばならない。虚構を虚構として描くのではなく、虚構を現實として描かねばならない。それは徐志摩の詩ともちがってはや文學作品ではなくなる。ところが左聯の側はまさに逆の立場にあった。左聯の側は、その政治的意圖の下に書かれた作品が現實の社會をよりよく映せば映すほど文學的にも優れた作品になる可能性をもつ。少なくとも近代中國においては、その革命の長い期間にわたってこのことが言える。それがつまり瞿秋白のいう「現實主義」である。

したがって、瞿秋白が民族主義文學に對して「何も描寫

しうるところがない。ただ『壯士は胡虜の肉を飢えたようにむさばり、談笑しながら匈奴の血を渴えたように嚙る』と大聲で叫んでいるだけだ」(「屠夫文學」と論斷する時、間接的には左聯の側の「スローガン化」「論文化」した作品への批判になる。その點をはっきり述べたのが、少し後で書かれた「犬を描け」である。この文章は『北斗』創刊號に載せられているものだが、同誌上にやはり張天翼の作品を論じた「新人張天翼の作品」というのが載っていて、「犬を描け」とよく似た論點に立っているが、瞿秋白のものが優れている(「犬を描け」は短篇で、瞿秋白の作品批評の典型であるので、本論の末に附録として譯出した。参照されたい)。

「犬を描け」は、主に題材の面から張天翼の作品を批評しているが、その論法は民族主義文學を反駁する時と重なる部分がある。幽靈を描き犬を描け、という時、その主張を支えているのは先に述べたような「現實主義」である。題材として何を描くかという以前にその題材をいかに描くかが問題なのであり、その上で題材として犬の方が幽靈に優るのである。現實を社會科學(つまりマルクス主義)に

よって圖式化することは決して文學ではない。瞿秋白の作品批評は常に「完全無缺を求めて」かなり厳しく批判するのだが、だからといって左聯側の文學に對しては、その作品を全面的に否定することはない。例えば〈學閥萬歲〉の中の「小反動文學」と「大反動文學」の區別や「プロ大衆文藝の現實問題」⁴⁰⁾の中の「非大衆的プロ文藝」と「プロ大衆文藝」の區別にも見られることである。〈我々の任務〉の中の「反動的大同盟」と「革命的文化」という簡單な二分化とは明らかに違ひ、また錢杏邨の二つの魯迅論とも違ひている。このような作品の區別からわかるのは、瞿秋白がある種のモデルを想定した上でそれに照らして中國の實際の作品を批評していることである。それは言うまでもなくソ聯の新しい文學、例えばセラフィモヴィッチの《鐵の流れ》のような作品であった。その意味でも革命文學論争の時に比べて具體的な文學論であった。

ちょうどこのころ茅盾らを中心にもっぱら創作を主として掲載する雑誌の刊行が計畫されていた。九月に創刊された《北斗》である。この創刊についても瞿秋白の意見がど

瞿秋白と初期左聯（淺野）

うやら取り入れられているらしい。茅盾によれば「彼〔瞿秋白〕は《前哨》をやっていくことは堅持して、左聯の理論指導の雑誌とし、その他にもう一つ文學雑誌を出版して、もっぱら創作を載せる必要があることを建議した」⁴¹⁾のである。この雑誌は「それほど赤くない」⁴²⁾丁玲を主編者にして、冰心・葉聖陶・鄭振鐸・徐志摩など左聯に参加していない文學者の作品も載せている。「左聯轉變」の一つの成果であった。

さてこの雑誌の出版される直前に九一八事變（滿州事變）が起こる。日本帝國主義が直接武力にうったえた中國侵略の第一歩であり、この事件を境に中國革命の主要な課題が日本帝國主義との鬭争に變わる。中國共產黨はただちに反帝運動と日本帝國主義に對する武力抵抗をうったえた抗日宣言を發表する（九月二十二日）が、國民黨は、翌年上海で日本軍と砲火を交えた第十九路軍の抵抗（一二八事件）を中止させたことにはつきりと見られるように抗日運動を彈壓して對日無抵抗・内戰優先の政策をつづけていた。

この九一八事變に對する左聯の反應は、五烈士事件の時

とちがつて素早かった。九月二十八日付の《文學導報》第五期がそれである。この號には三篇の文章と一篇の詩が載せられているが、冒頭の宣言以外はすべて瞿秋白の手になるものである。或いは全部が彼の書いたものかも知れない。冒頭の宣言は左聯の署名の《國際無産階級および勤勞民衆の文化組織に告ぐる書》⁴³で、日本軍の東北侵略と東北人民の虐殺・國民黨の無抵抗に對する抗議および日本帝國主義反對とソ聯擁護を訴えている。文學に言及するものではないが、左聯の政治的立場をよく示している。

次は《大衆文藝と帝國主義に反對する闘争》⁴⁴で、九一八事變と文學を關連させて述べる。「民族主義の大家はこのような『民衆文學』『舊形式の民間文藝』を利用して彼らの武斷宣傳を作り出している」が「新文學〔左聯の文學〕と民衆は以前から絶縁している」と、民間文藝の形式をうまく利用して大衆のイデオロギーを組織しているのが、むしろ「死に等しい鎮靜を彼ら〔大衆〕に命令している國民黨」の側であることを指摘する。國民黨は日本帝國主義に「さっさと武器・工場を手渡そうとしている」ので、兵士・

勞働者・農民は早急に自らの紅軍を組織して日本帝國主義と中國の資本家地主官僚を打倒しなければならない。だから文學も大衆に向わなければならない。「説書」や「歌謡小曲」の體裁スタイルを用いて「人に讀ませてしゃべるのと同じようにわかる」ように書かなければならない、と。

九一八事變に直接の端を發する反日運動はかなり盛り上がったが、現實的な解決（抗日戦争勝利）のための政治的な方針は、後の八一宣言・抗日民族統一戦線の提起を待たなければならぬ。だからここで瞿秋白の李立三路線的な政治路線上の性急さを見出してそれを批難するのは意味がないだろう。文學理論として我々が見出すべきは、後でふれる《プロ大衆文藝の現實問題》の中で「煽動的作品」が「時事のため、大事件のため書かれる」ので「闘争を組織するために書く作品」「階級制度下の人生を理解するために書く作品」と區別されるのと同じ考え方であろう。封建的・賣國的イデオロギーを宣傳するために國民黨側によって、やはり「煽動的」に用いられている舊形式の民間文藝に對抗するために、必ずしも藝術的に優れていなくとも緊

急の必要に應える作品の創作を主張することである。《文學導報》の翌號（第六七期合刊號）に左聯のアピールが掲載されるが、その中にも《愛國時曲抗日小熱昏》なる小唄を揶揄して「この小さな熱情は、まったく大熱情總司令〔蔣介石〕の『沈靜・國際公理』等の有名な演説の通俗文藝における譯本にはかならない」と、國民黨側の方が民間文藝をよく利用した政治宣傳にふれている。この號にはさらに洛陽（馮雪峰）が《統治階級の「反日大衆文藝」の檢討》を書いて、民族主義文學者の様々な「大衆文藝」が政治宣傳に用いられていることを述べている。左聯の側からも民間文藝の形式を用いた政治宣傳が必要だというわけである。

そこで、九一八という「大事件」のために書かれたのが、やはり第五期の《東洋人の出兵》という詩である。この詩は北方語と上海語の二つの方言で書かれており、前の宣言の内容を分り易く説いている。その前書きに「誰か曲をうまく歌う人があれば、うまく曲をつけてほしい」とあり、《瞿秋白文集》の注によると小冊子として印刷され、上海

瞿秋白と初期左聯（淺野）

の街頭に頒布されているので、ある程度人口に膾炙したかも知れない。やはり翌號の《文學導報》に凌鐵という人が《饑餓的檻穽的一群》という「朗誦詩」を發表してこれにつづいている。

最後に《「黃人の血」及びその他》という評論で民族主義文學の詩を攻撃する。

《文學導報》第五期は以上のようにほとんど瞿秋白一人の手になるものであるが、このことは左聯に参加して數ヶ月にすぎない彼が左聯の中でどれほど重要な役割を擔っていたかをよく示している。

瞿秋白のこれら一連の左聯への影響はこの《文學導報》誌上によく現れている。すでに引用したものの他に、第四期には茅盾が石筋の筆名で民族主義文學の宣言を、その來源から分析し批判した《「民族主義文藝」の現形》を書き、第六七期合刊號に魯迅が晏敖の筆名でやはり黃震遐の作品を批判した《「民族主義文學」の任務と運命》を書いているのも、第三期所収の《屠夫文學》を受けている。

さて、そうした中で矛盾が左聯の畫期とした〈新たな任務〉⁴⁸は決議されるのである。

この決議は次の七章からなる。

- (一)、新たな時期への進展
 - (二)、新たな時期の客觀的特質
 - (三)、新たな任務
 - (四)、大衆化の問題の意義
 - (五)、創作問題——題材・方法・および形式
 - (六)、理論闘争と批評
 - (七)、左聯の組織および規律
- (一)と(二)は、先にふれた宣言文と同じ基調で中國の政治情勢を述べているが、注意すべきは「右翼日和見主義」とともに「左翼空論」をこれまでの過ちの原因として指摘していることである。これは中共四中全會が李立三路線を徹底的に批判したことを受けていると思われるが、⁴⁹政治上の李立三路線に相當するのは左聯においては三〇年八月の決議〈我々の任務〉に見られるような政治主義・文學輕視である。だから(三)において、反帝國主義・反國民黨・ソヴィエト

擁護などの「新たな任務」は「文學の領域で」と限定される。すべての文學的營爲を目前の政治的な利害による實際行動におきかえることによって、(四)(五)のような方針は生れてこない。その意味でこの限定は有効である。

(四)は「勞農兵貧民通信運動……等を組織して」大衆を讀者とし作者とすることと文學者自身の生活の大衆化を提起するが、「廣汎な青年學生と一般文學者・文藝に携わる青年を、われわれの運動の對象外に投げだすことだと考えてはならない」と小資産階級への配慮をわすれない。(五)では題材については様々な可能性を認め、方法としてはマルクス・レーニン主義の學習と外國の無産階級文學の研究を通じて創作方法を確立していくことと、觀念論・ロマン主義への反對を言う。形式として「聞いてわかる」ことばを主張し、それは「勞働者農民のことばの表現能力をゆたかにし、高めるべく、新たなことば、「文學」表現のことばを創造する使命を擔っている。」様式についても民間文藝の様式等の研究を呼びかける。

さらに(六)で理論研究の重要性にふれて「いまだちに學

習と研究に着手し、まず眞剣にマルクス・レーニン主義の研究をはじめなければならぬ」ことを強調する。最後に(七)でかなり厳しい規律を定めている。

この決議は、全體的にみるとやはり文學そのものを重視している。とくに「我々の任務」と比べてみるといっそう明らかであり、矛盾のいうとおりである。

確かに、この決議も後の時代から見れば「左傾」の傾向が強い、誤りの多いものかも知れない。例えば丁易は、解放後の文學史の中で次の四點を左聯の缺點として挙げている。「まず、當時左聯を直接政治闘争に従事する一般大衆の革命團體と見なし、それが特別に發揮しなければならぬ特殊な戦闘能力と作用を輕視した。(中略)この缺點は、上述の一九三一年左聯執行委員會が決議した「中國無產階級革命文學の新たな任務」の中に見出せる。」「次に(中略)完全に、公開的な『合法、半合法』的な存在を勝ちとる闘争を放棄し」「第三に、左聯を政黨に近い組織と見なしている。上述の決議の『組織と規律』の中に規定されているような厳しさが、それを證明している。」「第四は、文

瞿秋白と初期左聯(淺野)

藝理論上の教條主義と機械論の傾向である。(中略)これは上述の決議の『創作問題——題材・方法および形式』の中に明らかに表現されている。⁵⁰⁾

いずれもこの「新たな任務」を材料に批判を展開しているのだが、確かに「合法的」な雑誌として出發した『北斗』が、やがて「左傾」して發禁に逢うなど丁易の指摘する缺點はある程度うなずける。しかし、この「新たな任務」は不充分であるにしろ、まさに丁易の指摘する缺點を自覺し、それを克服しようとする意圖の下に決議されたものなのである。

まず第一の缺點は、文學の自律性を一定認めた「(三)新たな任務」によって、第二の缺點は、やがて發禁になるとはいつても「合法的」な『北斗』の創刊によって反論される。第三點については、確かに「一定のかつ一致した政治的觀點をもつ、行動し闘争する團體であつて、作家の自由組合ではない」と「我々の任務」と同じように厳しく規定している。ただその厳しさは、翌一九三二年三月、左聯祕書處擴大會議通過「左聯改組に關する決議」⁵¹⁾に見られるような

ものだと考えるべきではないだろうか。これは「各聯盟員は、必ず少なくとも一種は具體的工作を擔當しなければならぬ。」(一)創作と批評、(二)大衆文藝工作の執行、(三)「文研」運動への参加、(四)翻譯工作……しかる後にやつと聯盟員の資格を取得できる」と文學上の實際工作を義務づけている。さらに第四點については、創作を何らかの形で規制するという意味では機械論的であるかもしれないが、しかしすでに見てきたようにこれは茅盾や瞿秋白が主張していたリアリズム論にそったものであり、むしろ教條主義機械論と對極のものであった。

左聯はこの決議によって、例えば茅盾の長編小説や魯迅の雜文を單なる妥協でなく評價できる可能性をもったのである。そしてこの決議の前提として瞿秋白の論文「プロ大衆文藝の現實問題」を位置づけることができるだろう。

この論文が公表されたのは一九三二年三月であるが、實際に書かれたのは一九三一年十月二十五日であり、〈新たな任務〉が發表される『文學導報』第八期出版の二十日ほど前である。おそらく〈新たな任務〉が左聯の内部で討論

されたところであり、瞿秋白と左聯とのかかわりを考えればこの論文はその討論のたたき臺として書かれたのではなからうか。そうでないにしても、瞿秋白の討論への参加かまた別の形でか、〈新たな任務〉に大きな影響を与えていることはまちがいない。特に〈新たな任務〉の(四)(五)などはこの論文がなければ書かれなかったろう。

また瞿秋白の文學論にとつてもこれは、それまでのものを總括した綱領的な論文でもある。その中で「プロレタリア現實主義」という言葉は、茅盾がかつて革命文學論争の中で主張していた「新寫實主義」を新しく提起しなおし、文學の運動論と結びつけて理論化したものである。そして〈魯迅雜感選集序言〉の書かれる理論的な前提ともなる。今ここにやや長くなるが要約しておく。

序文で「プロ大衆文藝」と「非大衆的プロ文藝」の違いを述べて「今日の主要工作はプロレタリアの大衆文藝を創造すること——あの反動的・大衆文藝に宣戰すること」によつて前二者の差異が消滅する、と主題をのべる。つづいて、一、どんなことばで書くか——「周朝語」「文語」「明朝

語」「舊口語」「ラバ語」「五四式の口語。文語や外國語の語彙……文法を混入した新式口語」は、讀み上げても大衆にはわからない。讀んでわかることばで書かなければならない。これはプロ大衆文藝のあらゆる問題の根本をなす問題である。

二、どんなものを書くか——作品の體裁。^{スタイル}「禮拜六派」などに對抗して、舊式體裁の小説・歌謡小唄・歌劇話劇・連環畫の形式等を用いる。ただし舊體裁に従いつつこれに改良を加え、新形式を創造する。歐化文藝では中國の大衆にはわからない。

三、何のために書くか——題材及び藝術内容における目的。この問題についてはプロ大衆文藝と非大衆プロ文藝との間にはほとんど差がない。(一)煽動的作品。初歩的であり「速成品」「スローガンの文學化」でよい。(二)鬭争を組織するために書く作品。階級鬭争を描き、敵を暴露し、社會主義と反帝國主義を宣傳する作品。(三)階級制度下の人生を理解するために書く作品。宗法主義と俗物主義に反對して無産階級の人生を描く。五四時期の禮教反

對鬭争は知識人に限られていた。我々は「無産階級の五四」をもつべきであり、それは革命的社會主義的運動でなければならぬ。

四、どのように書くか——創作方法について。無産階級の立場から、現實の人生・社會關係・社會鬭争を「推論・歸納」ではなく「描寫・表現」の方法によって反映させる。そして舊い大衆文藝の「感情主義・個人主義（英雄主義）・大團圓主義・限取り主義」に反對しなければならぬ。つまりプロレタリア大衆文藝は、必ずプロレタリア現實主義の方法で書かれなければならないための運動が必要である。

五、何をすべきか——(一)俗語文學革命の開始。完全な公開路線を勝ちとり、雜誌を發行して中國語を研究する。(二)街頭文學運動。文學者が大衆の中にはいつて生活し「大衆の文藝生活」を學ぶこと。(三)勞農通信員運動。俗語新聞を發行して大衆の中から文學者を育てる。(四)自己批判の運動。大衆文藝に關する討論と一般的創作方法に關する討論の開始。

瞿秋白の文學論を「ことばの大衆化」に收斂させてとらえることには、偏向がある。もちろん「ことばの大衆化——無産階級の五四」という問題を提出したことの意義は大きい。瞿秋白がソヴィエト區へ赴いた後（一九三四年以降）に論議された文藝大衆化の問題は、ことばをめぐってのものであり、魯迅が瞿秋白を代辯する形で行われるし、中國語ローマ字化への展望は、新中國成立後〈漢語拼音方案〉（一九五八年）で實現へ第一歩をふみ出した。また、右の論文を要約した〈大衆文藝の問題〉⁽⁵⁷⁾では、確かにことばの問題がより前面におし出されている。しかし、左聯への貢獻という意味では〈プロ大衆文藝の現實問題〉の中で述べられている「現實主義」の方がより重要である。そのことは、一九三二年になって茅盾との間でやりとりされた論争にも見ることができると。

茅盾は七月、〈大衆文藝の問題〉を讀んだ感想として〈問題中の大衆文藝〉⁽⁵⁸⁾を發表して、瞿秋白に異議を唱える。中國では普通語がまだ生まれていないことを指摘した上で、創作においては「技術が主であり、ことばは末」とする。

そしてことばの問題について、「大衆が聞いてわかる『ことば』を使いさえすれば、それでもう文藝だ（この點だけならべつに難しいことではない）と思ひこませかねない」、瞿秋白のいう「聞いてわかることば」とは「歐化・日本化」した句法・抽象名詞・文言の形容詞動詞を排除した「新文言」を用いる他はない、と述べる。また「技術が主」については、瞿秋白が〈プロ大衆文藝の現實問題〉の中で論じた「(一)どんなものを書くか、(二)何のために書くか、(三)どのように書くか」という創作論をさらに詳細に論じているのだが、それは實作者プロパーからのものである。

これに對して瞿秋白は〈再び大衆文藝を論じて止敬に答える〉⁽⁵⁹⁾をすぐに書いて、茅盾の實作者プロパーの觀點を批判している。それによると「大衆文藝の廣汎な運動を抹殺し、ただ大衆文藝の描寫方法の問題を残すだけの結果になっている」「革命的大衆運動は、數多くの——幾十幾百幾千篇の中からしか生まれてこない。この點に關するかぎり、革命的大衆文藝は反動的大衆文藝と同じなのである。」「差異は『新文語』と死んだ口語を攻撃する運動を起こそうと

するか、それを無用と考えるかにある。」

瞿秋白が茅盾に對して強調するのは文學の運動である。文學の創作者の養成と同時に、中國語の變革によってその讀者の產出も視野に入れた運動の發動である。このことは文學への造詣の深さとともに、政治家としてのセンスの鋭さをよく示している。

だからことばの問題は文藝大衆化の初步的な段階として提出されたのであって、それをもって創作論に代えようとしたのではない。「作者に對し、一、どんなことばで書くかに注意すること、二、最初の一時期にはわかりやすい描寫方法を運用し、舊小説の『形式的形式』をとり入れること、三、論文と文藝作品の差異を、最低限はつきりと辨別すること——以上三點を要求すれば、一般の『作家』は活動を開始できる、と考えたにすぎない。これは運動のはじまりである。」と、文學の運動としてまず最初にことばの問題をとりあげたのである。それは、中國語ローマ字化への展望をふまえた上で、更に廣汎な大衆を動員するためのものであり、文學運動を「ことばの大衆化」に收斂させる

瞿秋白と初期左聯（淺野）

ものではなく、前述した民族主義文學批判の中で「民間文藝の形式」の採用に力點をおいていたのと同じレベルでのものである。

したがって當面用いることばについては「かならず中國共通語には、眞の口語文——止敬氏のいう、しゃべれず聞いてわからない要素を排除した『通行の口語』——を使わなければならない」と茅盾の「聞いてわかることば」の定義に譲歩せざるを得ないのである。そして個々の作家については、すでにこの問題を克服し、或いは克服しつつあることを認めて、更に進んだ文學理論と創作のための論議を進めるべきだと述べている。だから、この運動論と創作論とを對立させて論じたという點で、明らかに茅盾の「誤解」であった。

以上のように、〈プロ大衆文藝の現實問題〉はことばの問題の他に、「現實主義」論の提出と文學運動論の二つの面から評價されなければならない。初期左聯においては、「勞農兵通信員運動」が運動論として抽象的に提出されたにすぎず、創作のための理論はなんら論議にならなかった。

一方茅盾は以前からリアリズムの提起はしていたが、大衆化と結びつけて文學の運動を、という視點をもつのはこれ以降であり、魯迅もまたそうであった。⁽⁶⁴⁾ 瞿秋白は兩者を結びつけて、「現實主義」^{リアリズム}を不十分ではあるとしても、まず最初に體系化したのである。

その意味で、瞿秋白が「左聯の轉變」において果した役割は、組織的には左聯結成によって團結した革命文學派と茅盾・魯迅らの文學者を、文學理論上再度結びつけたことでもある。

後に魯迅は瞿秋白に對して「人生得一知己足矣、斯世當以同懷視之」⁽⁶⁵⁾という掛け軸を送り、茅盾をして「もし一九三三年末、當時の王明路線の中央によって、秋白が中央ソ區に轉屬させられて、文化教育人民委員などにされず、彼がつづけて上海に留まっていたれば、『左連』後期、内部の不團結はあれほどひどくは發展せず、『二つのスローガン』さえ發生しなかったかも知れない」と残念がらせたのも、右の所以からであらう。

結 び

瞿秋白が左聯に關與していた二年餘の間に、左聯は主に三つの論争を経る。民族主義文學批判、文藝大衆化について、自由人・第三種人をめぐる論争である。いずれも瞿秋白が發動し、その基調をつくっている。本論では前二者を左聯における「現實主義」^{リアリズム}論の確立——瞿秋白の左聯への貢獻——という視點から扱った。そして、この「現實主義」は、かつての革命文學派の代表者の一人錢杏邨によってほとんどそのまま祖述され、更に一九四二年の毛澤東「延安に於ける文藝講話」へと引きつがれるのである。

ちなみに現在中國語で「リアリズム」は一般に「現實主義」と譯されるが、このことばを初めて「リアリズム」の譯語に用いたのは瞿秋白であるらしい。⁽⁶⁶⁾ すでに本論で述べたように「現實主義」は西歐流の「寫實主義」とはちがうものではあるが。

附 録

犬 を 描 け

張天翼の《幽界日記》は、我々に一つの鬼神世界を描き出してくれた。天翼の小説は、たとえば《二十一人》のようなものは、確かに彼自身の作風がある。彼は短篇創作において、人生の緊張にあふれた表現ができており、闘争の焦點をしっかりとつかむことができてゐる。彼の言語も確かに「人のことば」で、文言の混入は少い。しかし、迫力がやや缺ける。もし彼が生きた現實を反映することに力を注げば、かならずや彼の才能をのびのびと發展させるという任に充分堪えるだろう。しかし、最近出版された《幽界日記》は我々をいささか失望させた。これは我々が「完全無缺を厳しく求める」心をもたずにいられないからである。

第一に、題材の面についていえば、これは鬼神の世界である。問題は「鬼神」にあるだけでなく、主要にはむしろ「世界」にある。あなたは、自分の題材が地球の六分の五（六分の一はすでに革命を終えたソ連——譯注）だと思っ

瞿秋白と初期左聯（淺野）

ているが、これは大きすぎたのではないだろうか。世界の六分の五は、小説で描寫することはできない。その結果、世界を縮小して、科學の實驗室の中に置くことができるだけだ。そして科學の實驗室の中に、ミニ飛行機、ミニ潜水艦、ミニ電車を陳列している……その他に、生きた幽霊を若干加えても、結局眞實のものではなく、いわゆる「圖式化」(Schema)をまぬがれない。この種の題材は、それ自身が文學的表現に全く適さないのだ。六分の五の世界には共通の社會法則と歴史過程があるとはいっても、しかしここの現實生活はきわめて複雑で、その發展途上には多くの面で不均衡があるものなのだ。これらの共通の法則の意義は、極度に繁雜で變動している現象に適應して、我々に社會現象を理解する一つの手がかりを與えることができるところにある。もしこれらの法則を文藝の形象の中で機械的に展開させるならば、自然と庸俗な單純化の方へ向わざるをえない。作者の《幽界日記》はまさにこの道を進んでしまった。もちろん社會科學の參考材料として見ると、これは一冊のなかなか「面白い」本といえなくもない。し

かし文藝創作として見るならば、失敗作といわなければならぬだろう。

第二に、この小説の題名は、この小説の中味が「うそ八百（原文「鬼話連篇」）」であることをすでに告げている。これでは何にもならない。これではどうしようもないでたためではないか。人間の話をして幽霊のこととするよりも、幽霊の話を人間のこととしたほうがよい。しかしここには非常に大きな弱點が暴露されている。つまり作者自身が自分に大きな自由を與えてしまったのである。「幽界」には本當の幽霊が一匹もないのだ。幻想はどんな範圍もなくすることができ。これはもとよりうまい方法ではあるが、往々にして骨折り損になりやすい。古いことばはうまいことを言っている、「幽霊を描くは易く、犬を描くは難し*」と。もし犬を描いたならば、どんな人であっても一目見れば似ているかいにかすぐにわかる。いまは描いているのが幽霊であつてみれば、ただ幽霊がいるのがわかるだけだ。

實のところ、幽霊は決して描くことができないものでは

ない。幽霊が作用のないものだと思つてはならない。フランス人はこんな諺をもっている。「Le mort saisit le vif」——「死人が生きた人間をつかまえた」。中國の情況は、いま特にこれにあてはまるところへ來ている——まったく完全にこのことばにあてはまる。袁世凱の幽霊、梁啓超の幽霊、……の幽霊、すべての様々な幽霊が、まだ中國を統治している。とりわけ孔子の幽霊はいまだに全世界を統治しようとして夢想している。禮拜六の幽霊は眞正國產品の文藝界を統治している。……このように述べていけばまったくきりが無い。我々は幽霊を描かなければならないのに、なぜこれらの幽霊を描かないのか。

犬を描くことについていえば、それはなおよいことだ。一般的にいえば、鬼神の世界を描くより禽獸の世界を描いた方がよい。もともと中國は、おのずと地球の六分の五の中にある。そして中國にいるのは走狗と牛馬だけなのだ。しかし《幽界日記》の中には人間の幽霊が見出されるだけで、犬の幽霊も見出されないし牛馬の幽霊も見出されない。たとえ牛馬の幽霊がいたとしても、それは影にすぎない。

だから私は言う、やっぱり犬を描け、と。

八、十、

*

韓非子外儲說左上第三十二傳二、「客有爲齊王畫者、齊王問曰、畫孰最難者、曰、犬馬難、孰易者、曰、鬼魅最易、夫犬馬人所知也、且暮罄於前、不可類之、故難、鬼魅無形者、不罄於前、故易之也。」

翻譯は『文集』に據った。『文集』のは『北斗』掲載のものが若干手直しされている。

注

(1) 茅盾へ左聯前期——回憶錄三、《新文學史料》一九八一年第三期、《新華文摘》一九八一年第十一期に轉載。なお、本文・注ともに書名・雜誌名を《》で、作品名・論文名はへで示して繁をさけた。

(2) 郭沫若へ革命與文學（一九二六年四月十三日執筆）、一九二六年五月十六日《創造月刊》第一卷第三期。

(3) 例えば、錢杏邨へ死去了的阿Q時代、一九二八年三月一日《太陽月刊》三月號。

この中で錢は、魯迅を小資產階級作家の典型と見なし、「庚

瞿秋白と初期左聯（淺野）

子暴動前後から清末までを代表できるだけだ」といっている。杜荃へ文藝戰線上的封建餘孽（一九二八年八月十日《創造月刊》第二卷第一期）に至っては、魯迅をファシスト呼ばわりしている。他に馮乃超・成仿吾などが魯迅を攻撃している。ちなみに魯迅の《三閑集》は成仿吾が魯迅を罵ったことばから命名された。

(4) 茅盾へ從牯嶺到東京、一九二八年七月十日《小說月報》第十九卷第十號。

(5) 魯迅へ對於左翼作家聯盟的意見、一九三〇年四月一日《萌芽月刊》第一卷第四期、《二心集》所收。《三閑集》序言、一九三二年四月二十四日筆。

(6) 例えば、錢杏邨へ魯迅、一九三〇年二月十日《拓荒者》第一卷第二期。錢は、この論文で注(3)に舉げたへ死去了的阿Q時代における魯迅評價を改める。「魯迅は時代の車輪に從つて進展することができず、限らない打撃と傷害を受けたけれども、彼の心は日夜封建勢力の遺毒を被っているために燃えている。彼は嚴然とした體驗から、封建勢力が必然不可避に崩壊するだろうことを知っており、同時に新時代の必然的到來を『朦朧』と認識している。」「我々は魯迅が無產階級の立場に立った新しい反封建の創作を生み出すことを期待している。」と、魯迅の過去における積極的意義を評價しているが、それが「資產階級人道主義」であることはかわりない。自由大同盟、左聯の成立を射程に入れた戰術的な論文の感は否め

ない。

- (7) 魯迅自身のことばでいえば「私はそれから創造社に感謝したいことであるが、それは『押しつけられて』いろいろな科學的な文藝論を讀まされ、以前の文學史家たちが大いに論じて、もうもすっきりしなかった疑問をわからせてくれたことである。(中略) 進化論だけを信じる偏向を救ってくれたことである。』(《三閑集》序言)、「もともと、この熟知した自分の階級を憎惡し、それが壊滅するのは少しも惜しくなかったのだが、後にはまた事實の教訓によって、ただ新興の無産者にだけ將來があると考えるようになったのは確かである。』(《二心集》序言)、一九三二年四月三十日筆。また一九二八年ごろからマルクス主義關係の書物の購入が目立って増えていることが《魯迅日記》の《書帳》からわかる。なお魯迅の文章は《魯迅選集》を參考にして譯す。

(8) 一九三〇年二月十五日、上海で結成大會が開かれて、反帝國主義、反軍閥、人民の言論・出版・結社・集會の自由と權利を宣言した。郁達夫、魯迅、田漢、鄭伯奇、彭康、馮雪峰、王學文、沈端先ら五一名が宣言に署名。この翌日「上海新文學運動家の討論會」が開かれ、「國內左翼作家が團結して立ち上がり、共同の運動をすることの必要を全會で認め」「より廣汎な團體組織の準備委員會が成立した。』(一九三〇年三月一日《萌芽月刊》第一卷第三期の報道)左聯の準備委員會である。なおこの間の事情については、竹内實《左翼作家連

盟の成立まで》一九六八年《東洋文化》四十四號參照。

- (9) 郭沫若《卓子的跳舞》一九二八年五月一日《創造月刊》第一卷第一期。

(10) 《中國左翼作家聯盟底理論綱領・行動綱領主要的工作方針》一九三〇年三月十日《拓荒者》第一卷第三期。また一九三〇年六月十六日《沙淪》一、一九三〇年五月一日《大衆文藝》第二卷第四期。《資料世界》プロレタリア文學論集(以下《資料》と略稱)第三卷に譯載。

- (11) 「社會主義リアリズム」ということは、一九三二年十月二九日から三日間開かれたソヴィエト作家同盟結成準備委員會で、キルポーチンが《新段階に立てるソヴィエト文學》という報告の中ではじめて用いたらしい。一九三四年五月六日の《フラウダ》が簡単な定義を下し、同年八月十七日から九月一日まで開かれたソヴィエト作家同盟第一回大會初日に行われたジュダーノフの演説によって、社會主義リアリズムについてのソ聯共產黨の見解が定着した。だからこの時点で教條主義的な社會主義リアリズム論は中國に輸入されていない。
- (12) 《對於左翼作家聯盟の意見》注(5)と同じ。《我們要批評家》、一九三〇年四月一日《萌芽月刊》第一卷第四期、《二心集》所收。

(13) 一九三〇年五月十日刊。當時上海で刊行されていた左翼雜誌十三誌の合同版。これらの雜誌のうちのほとんどがこれ以後停刊している。誌名を挙げると《文藝講座》《拓荒者》《萌

芽月刊》《現代小説》《新文藝》《社會科學講座》《新思潮》
《環球旬刊》《巴爾底山》《南國月刊》《美術月刊》《大眾文藝》
《新婦女雜誌》。附表参照。

(14) 丁玲《關於左聯的片斷回憶》、《新文學史料》一九八〇年第一期。中島みどり編譯《丁玲の自傳的回憶》に依った。

(15) 馮雪峰《回憶魯迅》（一九五七年版）《左聯》時期一、魯迅先生對「左聯」的態度。

(16) 《左翼作家聯盟的兩次大會記略》、一九三〇年六月一日《新地月刊》第六期。《新地月刊》は《萌芽月刊》が名を換えたもの。

(17) 《無產階級文學運動的新的情勢及我們的任務》、一九三〇年八月十五日《文化闘争》第一卷第一期。

(18) 李立三路線は一九三〇年五月〜九月の短期間ではあるが、中國共產黨内を支配した極左路線。《若干の歴史問題についての決議》（一九四五年四月二十日中國共產黨第六期七中全会決議。邦譯《毛澤東選集》三一書房版第七卷の附録による）に従って要約すると次のようなものである。

革命の主體的な組織の力を過大評價して武装蜂起の條件がととのったと考え、また中國革命の不均等性を認めず、革命的危機が各地で一樣に成長していると考え、世界革命の不均等性を認めず、中國ブルジョア民主主義革命の長期性を認めないため、革命の「新しい高まりと、まず一省または數省で勝利すること」という極左的な決議を採擇して、冒險的な武

瞿秋白と初期左聯（淺野）

装蜂起を準備し、すべての日常活動を停頓させてしまった。

(19) 同じく《若干の歴史問題についての決議》によると、まだ李立三路線に對する協調と妥協の精神があらわれていたが、全國的な蜂起をやめさせ、日常活動を回復した會議である。しかし「一九二七年の『八七會議』以降、とくに一九二九年以降、ずっと黨内に存在していた若干の極左的思想と極左的政策は、六期三中全會でも、六期三中全會後においてもなお濃厚に存在していた。」

(20) 一九二〇年代から三十年代初めにかけて、文學の大衆化についてソ聯をはじめ各國で理論化と實踐における摸索がなされていた。その課題は知識人作家の大衆化と、労働者通信員運動にみられるような労働者出身作家の養成であった。ソ聯では一九二一年コミンテルン第三回大會の「大衆の中へ」というスローガンを受けて軍通信員、農村通信員、労働者通信員が組織され、《フラウダ》など共產黨關係の出版物を舞臺に、セラフィモヴィッチの《鐵の流れ》、ファジーエフの《壊滅》などの成果があった。ドイツでも二〇年代のダウディステイルや《エッセン突撃》を書いたマルヒヴィツァなどの労働者出身作家がいた。《資料》第四卷三四一頁以下参照。

(21) この四中全會で、王明らが黨内の主導権を握り、「三度目の、李立三路線の極左的偏向よりも一層頑固で、いっそう『理論的』であり、いっそう形もととのった、」王明路線といわれる極左路線が始まる（《若干の歴史についての決議》前

述)。しかし、左聯においては李立三路線のときと大きく違う変化は見られない。皮肉なことこのとき退けられた瞿秋白が本論で述べたような役割を果たしている。

(22) 一九三〇年三月、國民黨浙江省黨部から「反動文人魯迅」の逮捕令が出た。

(23) 周全平は互助會の仕事の中での「反革命行爲のため」一九三一年四月二十日付で、葉靈鳳・周鏡英は民族主義文學への参加のためにそれぞれ四月二十八日、五月二日付で左聯から除名される。へ周全平・葉靈鳳・周鏡英除名の通告」一九三一年八月五日《文學導報》第一卷第二期。

(24) 注(1)の茅盾の回憶の中に「《前哨》の二字は魯迅の書いたものである。しかし、活版は大きな印刷所を捜さなければならず、大きな印刷所には蔣一味の特務が潜んでいる恐れがある。だから二字を二つに分けて木刻工に彫ってくれるようにしたのみ、聯盟員で表紙を刷った。中味の各篇の文章も、やはり分けて小さな印刷所に印刷を頼んだ。五烈士の寫眞は、聯盟員がみずから手を動かして雑誌の中に貼りつけた。だから雑誌の正式の發行は七月ごろになった。」とある。馮雪峰が初めて瞿秋白と知り合ったのがこの雑誌の下刷りを茅盾の家にもっていったとき(五月)であるから、それから更に二ヶ月経っている(注(4)《回憶魯迅》の中のへ六、關於他和瞿秋白同志的友誼」に見える)。

(25) 一九三一年八月五日刊。この日付からも前號が七月出版で

あることが傍證される。

(26) 一九三一年三月創刊。週刊で翌年六月發禁になるまで六十號が刊行された。

(27) 許廣平著松井博光譯《魯迅回憶錄》一九六頁。

(28) 注(26)參照。

(29) へ擁護四中全会反對右派的決議案和聲明書、秋白同志聲明書(一)、一九三一年、二月十五日《黨的建設》第三期、邦譯《中國共產黨資料集》5の一九〇頁。四中全會については注(21)參照。

(30) へ《多餘的話》は一九三五年、長汀の獄中で書かれ《中央日報》《逸經》などの新聞に發表された。司馬璐《瞿秋白傳》(一九六二年香港)、周紅興《瞿秋白詩歌淺釋》(一九八一年北京)に再録、邦譯は《中國の革命と文學10、革命回想録》。この文章は、かつては偽作とされていた(魯迅は偽作と斷定し、楊之華も偽造・改修のあるものといっている)が、文革中に手稿も發見され瞿秋白轉向の證據とされた。一九七九年瞿秋白が名譽回復された後は、意氣消沈して消極的な思想を示しているが、自己に對する深刻な分析をして、誠實な人格を表現しているという評價が多い。妥當な評價である。

へ重評《多餘的話》(《歷史研究》一九七九年第三期)、《近代中國人物》(一九八三年重慶)、《多餘的話》の兩段佚文(《上海師範學院學報》一九八〇年第四期《新華文摘》一九八一年第三期轉載)、新島淳良(へ北京で見た瞿秋白批判)(《東洋文

化》一九六八年第四四號）などを参照。

- (31) 《瞿秋白文集》（以下《文集》と略稱）第二卷所收。小資產階級知識人の主人公が資本家に身賣りして労働者を抑壓していく様子とその心理を描いている。なお《亂彈》は瞿秋白の自選集で《矛盾の繼續》は收めない。《亂彈及其他》は、

茅盾の紹介で瞿秋白夫婦が一九三一年ごろ住んでいた家の家主である謝澹如が一九三八年五月霞社版として出版したもの。

- (32) 一九三〇年十月十日《前鋒月刊》第一卷第一期。

- (33) 一九三一年八月二十日《文學導報》第一卷第三期、《文集》第二卷。ただし兩者は若干異同がある。

- (34) 《文集》第二卷の注（三四二頁）に「當時國民黨の民族主義作家黃震遐は小説《離海線上》で自ら國民黨の軍隊《中央軍》をフランスの『外人部隊』に、中國をアフリカに準えたこの反動小説《離海線上》は蔣介石軍（つまり所謂『中央軍』と閻錫山、馮玉祥軍との戰爭を描寫したもの。」とある。未見。

- (35) 《文集》第二卷の注（三四三頁）に「《國門之戰》はもう一つの反動『民族主義文學』作家萬國安が書いた反共反ソの小説」とある。未見。

- (36) 《文集》第二卷所收。その注に「本文は最初は《猫樣的溫文》と題して《文藝新聞》三十二號（一九三一年十月十九日）に發表された。署名は v. t.。後に作者が今の題名に改めて《亂彈》に加えた。」とある。

瞿秋白と初期左聯（淺野）

- (37) 《畫狗罷》、一九三一年九月二十日《北斗》第一卷第一期、《文集》第二卷。

- (38) 李易水《新人張天翼的作品》、同右。

- (39) 一九三一年六月十日筆、《文集》第三卷。

- (40) 《普洛大眾文藝的現實問題》、一九三二年十月二十五日筆、《文集》第三卷、邦譯《資料》第三卷。《文集》の注によれば一九三二年三月左聯出版の小冊子《文學》に發表。

- (41) 注(1)に同じ。

- (42) 注(4)に同じ。

- (43) 《告國際無產階級及勞動民眾的文化組織書》、《資料》第三卷。

- (44) 《大眾文藝和反對帝國主義的鬭爭》、《文集》第三卷。

- (45) 《告無產階級作家革命作家及一切愛好文藝的青年》、《資料》第三卷。

- (46) 《東洋人的出兵》、《文集》第二卷。

- (47) 《黃人之血》及其他、《文集》には收めない。《黃人之血》は黃震遐の詩劇で《前鋒月刊》第七期、未見。注(34)参照。

- (48) 《中國無產階級革命文學的新任務》——一九三二年十一月中國左翼作家聯盟執行委員會決議——、一九三一年十一月十五日《文學導報》第八期、《資料》第三卷。

- (49) 王明路線の綱領的文章《兩條路線的鬭爭》は、李立三路線が實は右傾であると論斷している。

- (50) 丁易《中國現代文學史略》一九五五年七月、北京作家出版

社（香港文化資料供應社重版）第二章第二節四。

(51) 丁玲によれば「《北斗》は初めは確かにかなり灰色であった。（中略）しかし、二三號出てからは、やっぱりだんだん赤くなって、國民黨も注意するようになった。（中略）三二年七月に第二卷四・五合併號を出したときに、國民黨に封鎖された。」注(4)に同じ。

(52) 「關於左聯改組的決議」（一九三二年三月九日祕書處擴大會議通過）一九三二年三月十五日左聯祕書處出版《祕書處消息》第一期。

(53) 注(4)に同じ。また「讀《倪煥之》」（一九二九年五月四日筆）一九二九年七月合訂本《文學周報》第八卷）でも同じ主張をしている。

(54) 一九三三年四月八日筆、一九三三年七月青光書局出版《魯迅雜感選集》。魯迅評價の盡期をなす批評である。丸尾常喜「魯迅雜感選集序言」の理論的前提、一九七六年三月《東洋文化》五十六號を参照。

(55) 魯迅「門外文談」、一九三四年八月～九月《申報自由談》、《且介亭雜文》所收。

(56) 「大衆文藝的問題」一九三二年六月十日《文學月報》創刊號、《文集》第三卷、《資料》第四卷所收。

(57) 「問題中的大衆文藝」、一九三二年七月十日《文學月報》第二號、署名は止敬、《資料》第四卷。

(58) 「再論大衆文藝答止敬」、一九三二年十月十五日《文學月報》第一卷第三期、《文集》第三卷、《資料》第四卷。

(59) 瞿秋白と魯迅との間で交された翻譯に關する手紙はこのことを示していると思う（關於翻譯的通信、一九三二年六月《文學月報》第一卷第一號、《二心集》。瞿秋白の來信を魯迅が自分の返信とともに發表したもの。その後、更に瞿秋白から魯迅に手紙が出されている。一九三二年七月《文學月報》第二期。瞿秋白の手紙はどちらも《文集》第三卷に收める）。瞿秋白が魯迅の翻譯の誤りを指摘し、あわせて彼のことばについての意見を述べた來信に對して、魯迅は中國に於ける翻譯の歴史を述べて瞿秋白の性急さを指摘した返信を出す。更に、次の手紙で瞿秋白は魯迅の翻譯を高く評價しつつも、魯迅のいう「硬譯」が自然淘汰ではなく、それを意識的に進めて新しい譯語を作り出すことを主張している。

(60) 楊之華へ一個共產黨人——瞿秋白、《黨史資料》一九五三年第一期、《憶秋白》（一九八一年北京）に收める。

(61) 注(1)に同じ。

(62) 錢杏邨「文藝大衆化與大衆文藝」一九三二年七月二十日《北斗》第二卷三四合刊號、《資料》第四卷。

(63) 《文集》第四卷一一九三頁の注一を参照。また筆者の管見に依つても左聯成立以前の論文にはこのことばは見出されなかった。

(64) 依つても左聯成立以前の論文にはこのことばは見出されなかった。

(1980. 四川) より

(3月)